

ヤスクニ・レポ 239

西川重則代表のこと

山川 暁 (単立鶴川キリスト教会伝道師)

創造主なる唯一の神を信じるキリスト者にとって、日本は異教の国であると言ってもあながち間違いではないと思う。憲法は天皇についてこう規定している。

「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基づく」(憲法第1条)

だが、キリスト者はその天皇が皇室神道の祭司として、皇祖神への礼拝行為を行っていることを知らなければならぬ。その皇祖神とはキリスト信仰に立つキリスト者からすれば偶像に他ならない。天皇が生前退位し、その後継者が新しい天皇となった。新しい天皇は大嘗祭と呼ばれる儀式で、皇祖神と供え物を共に食するという。つまり、これは偶像に供えられた食物を口にすることで、霊威を受けると信じられているのだという。その儀式をマスコミが上げて報じている中、入院先のベッドで複雑な思いでそれを受け止めているのが西川重則代表である。天皇、そして天皇制に厳しく異を唱え続けてきたのが西川代表であるからだ。

西川重則代表が常々口にされていた言葉がある。それは「憲法に習熟しよう！」である。当然ながら天皇といえども憲法を無視することは許されない。天皇も憲法に縛られている存在であるからだ。憲法99条にはこうある。「天皇、又は摂政及び国務大臣、国会議員、裁判官、その他の公務委員は、この憲法を遵守し、擁護する義務を負ふ」と。天皇も憲法を遵守しなければならないのである。だが、新しい天皇は就任の言葉で、「憲法を遵守する」とは明言していない。これは何を意味しているのか。憲法に従うより、異教の神、皇祖神に従うつもりなのかと、勘ぐりたくもなる。憲法の前文では「主権が国民に存する」ことが宣言されている。天皇は象徴に過ぎず、この国の主権者は国民であるのだ。そして、天皇も国民と同様に被造物に過ぎない。創造主である神の前で

は、私たちと何ら変わるものではなく、創造主の前では天皇も罪人に過ぎないのである。決して特別の能力が与えられているわけではない。天皇も病気にもかかり、そして確実に死を迎える存在であるのだ。

西川重則代表は6月21日の「ヤスクニの集い」定例会に出席したあと、入院を余儀なくされ、現在に至っている。その西川代表のベッドの横には「来訪者ノート」が置かれている。そのノートには、お見舞いに来た方々の名前とメッセージが記されている。西川代表は来訪者が来てくれるのを楽しみにしているのである。

嬉しいことに西川代表には食欲が十分ある。「病院の食事はおいしい！」と西川代表は語っている。病院での日課は、弱って、歩行がままならない脚にリハビリを受けて、強める治療を受けているだけのようだ。病室に限定された生活であるが、聖書を読む時間はたっぷりである。読み慣れた新共同訳聖書が手放せない。文字通り、みことばによって西川代表は力を与えられているのである。

その西川代表は退院する日が必ず来ることを確信している。再び自宅に帰り、教会生活に戻り、礼拝を捧げ、祈禱会に出席し、イエスさまに従って、イエスさまから示された課題に取り組みたいと思っている。その課題とは、言うまでもなく国会の傍聴であり、また靖国神社ガイドである。靖国神社については西川代表から多くのことを学んできている。靖国神社はかつて東京招魂社と呼ばれていた。それが靖国神社と改称されたのは1879(明治12)年であった。何故「靖国」なのかといえば、国を「安んずる」思いを神社の名前に込めたためであったからだ、と西川代表は語っている。必要があり「伊藤博文伝」(春畝公追頌会編)を読んだ。そこに1873(明治6)年に、明治天皇が岩倉具視に与えた勅書が引用されていることに気づいた。その勅書には「安國安民ノ責

ヲ盡サントス」という文字があった。この「安國」こそが「靖国」であることを知った次第である。これに気づかされたのも西川代表のから教えられていたからである。

また、全国各地からの要請を受けて、講演に応えることも西川代表が願っていることである。そして、また執筆活動を再開することも含まれている。「早く原稿を書きたいですね！」と語る西川代表である。新しい原稿を書くこととは別に、西川代表はこれまで「ヤスクニ通信」

に書き続けて来た原稿をまとめて本にしたいという思いを語っている。入院した現在でもその思いにはいささかの変わりはない。その希望は既にいのちのことば社にも伝えているようだ。「来訪者ノート」にもことば社の編集者N氏の名前が記されていることがそれを示している。

西川重則代表がイエスさまによって強められ、再び現役に復帰を果たす日を迎えることができるように祈る次第である。

2019年10月18日奨励「神の怒りのぶどう酒を」 ヨハネの黙示録14:10 星出卓也（日本長老教会西武柳沢キリスト教会牧師）

この箇所は、獣とその像を拝むものに、必ずこの恐ろしい裁きが伴うことを教えるものです。

「そのような者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた神の怒りのぶどう酒を飲む。」とありますが、当時ぶどう酒は水で薄められたのに対して、この「混ぜ物なしに注がれた」ぶどう酒は、そのような緩和は一切なし。ぶどう酒を受け取る器も「神の怒りの杯」。その器に注がれるぶどう酒も「神の怒りのぶどう酒」。それが一切減刑なしに、緩められる事なしに注ぎつくされるのでありますから、その恐怖はいかばかりのものでしょうか。

この神の怒りの恐ろしさを体験した者はイエス様以外にいません。キリストがゲッセマネの園で「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。」「わが父よ。どうしても飲まずには済まされぬ杯でしたら、どうぞみこころのとおりをなさってください。」（マタイ 26:39、42）と祈られた杯が、ここで言われている神の怒りです。十字架の上で「我が神、我が神、どうしてわたしをお見捨てになられたのですか。」と叫ばれた、あの暗闇の中でキリストが飲み干された裁きこそが、神の怒りのぶどう酒です。

「また、聖なる御使いたちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。」とある「火と硫黄」とは、神の最終的な審判です。ソドムとゴモラの裁き等旧約聖書の至る所で、「火と硫黄」のモチーフは現れます。この火は、決して消える事のない火です。神の燃える怒りの対象として、神との交わりから永遠に切り離される事を語っているものです。「聖なる御使いたちと小羊との前で」という言葉は、神の子キリストも、神の僕

である天の御使いも、こぞってこの神の最後の審判を見守り、同意し、神が正しいことを証するということ。このような神の燃える怒りを受けるといふことの恐ろしさは、誰一人として表現できない、言い表す事の出来ない恐怖、完全なる暗闇です。キリスト以外はこの恐怖を誰も知らないのです。

先の13章において、獣とその像を拝まない者たちの苦しみと忍耐というものが描かれ、あるものは殺され、そして獣の印を受けない者は市場で売ることも買うこともできない困窮の中に置かれます。しかしこのような苦しみは、用意されている恐ろしい審判と比べれば、取るに足りない困難ではないのでしょうか。

2世紀のスマルナの主教ポリュカルポスは、火あぶりの刑を脅しに、キリストを罵るように求められた時、ローマ総督に次のように答えました。

「あなたは一時の間燃えて、消えてしまう火で私を脅すおつもりですか。それは邪悪なものに対して待っている消える事のない火の恐ろしさをあなたが知らないからです。」

その恐ろしさは地上における処刑とは比べることができないほどの恐怖です。キリストが十字架の上で受けた完全なる神の裁きと等しい審判が、いまや福音を拒否した者に用意されているのです。

第三の御使いの大声は、この恐ろしい結末に恐れ戦くように導くのです。そこに示されるただ一つの逃れの道。小羊であるキリストのまっただき贖い。十字架の上でこの恐ろしい審判を完全に身代わりに受けられたキリストを信じ、このお方のみを主とすること。この唯一の逃れの道と呼びかけるのです。